しつけ調査における記名と無記名の問題*

——質問紙法に関する一研究——

名古屋大学教育学部 石 黒 大 義**
野間教育研究所 藤 原 喜 悦

I 問題の概観

しつけの型や親の子どもに対する態度を把握するためには、観察法・面接法・質問紙法・プロジェクト法などがある。われわれはまず、質問紙法によつてしつけの型を把握する意図の下に、後述の如き調査問題を作製した。そのさい、記名要因が調査結果を歪めはしないか、記名と無記名とでは両親の回答結果に有意な差異が生ずるのではないかという問題が、第一にとり上げられた。

元来、質問紙調査法は心理学的研究の主要な方法として採用されてきたにもかかわらず、記名要因の影響に関する方法論的検討は、次に述べるように多くはなされておらず、この問題に関する組織的な研究はほとんどなされていないといつてよい。

L. V. Koos (1) の研究によると、一般に個人についての事実や意見・態度などには、記名は不利の方向に導くという結果が示されている。

また、J. B. Mallen (2) の研究では、記名事態は無記名事態よりも、クラスのための仕事においては協力性を増加させ、更に級友の品等においては著しく好意的な品等を与えており、児童に関するかぎり無記名の方が自然な応答を得るのに有利であると結論されている。

W. C. Olson (3) は、教育心理課程の女子大学生について、Woodworth-Mathews Personality Data Sheet を2回連続して行い、第一群には第1回目調査を記名で、第2回目調査を無記名で記入させ、第二群には無記名→記名の順序で記入させた。その結果によると、第1回目調査に関しては無記名群の方が記名群よりも、一般的非現実感・退屈感・逃避の要求・神経症的身体徴候な

どを報告しやすかつたが、好み・特殊な恐怖・衝動などについては、両群の間に大きな差異は見られなかつた。なお第1回目調査と第2回目調査との間に生ずる変動に関しては、両群の間に有意な差異が見られなかつた。この点に関して、彼は、第1回目調査で両群ともその調査に対してそれぞれの構えができたためか、あるいは記憶の要因が作用したためではないかと説明している。

また、R. P. Fischer (4) は、心理学専攻の女子大学生に、Mooney の Problem Check List を一週間の間隔で2回実施した。第1回目には記名、次に無記名で回答させたのであるが、その結果によると、個人に重要な関係を持たない調査問題に対する応答は、両条件の下でほとんど差異がなかつたが、重要な関係を持つ調査問題に対する応答は、無記名条件による方がはるかに多くなされた。

わが国においては、松井・羽場の共同研究 (5) が行われた。これは人事院の採用試験に上野式向性検査を「これは試験ではないから」という注意を与えた後に、第1群には無記名→記名、第2群には記名→無記名の順序で2回連続して行つたものである。被調査者は新制高校卒業程度の人々であるが、結果は記名・無記名の二条件下における変動は、両群間にほとんど差異のないことが明らかにされている。

以上の諸研究を検討してみると、質問紙調査法における記名要因の問題は、次の四つに要約することが可能であらう。

(1) 質問紙で調査しようとする問題の内容が、被調査者にとって如何なる意味を持つものであるかということが最も重要となる。調査問題が回答者について、何等かの価値評価をなすものであるか否かは、調査結果に記名要因が大きく作用することになるであろう。したがつて、調査問題の表現がきわめて重要な役割を持つものと考えられる。

(2) 質問紙調査が如何なる社会的事態においてなされるかが、記名要因の作用に重大な影響を及ぼす。調査実施にあつて、調査の趣旨を説明することも条件統整

* Signed Versus Unsigned Questionnaires of the Pattern of Parental Attitude toward Children—A study of Questionnaire Method—

** by Ishiguro, Taigi (Nagoya University) and Fujiwara, Kietsu (Noma Institute of Education)

の手段であるが、それ以上にその調査が如何なる社会的現実の中でなされるものであるかが問題となる。例えば「この調査は試験とは無関係なものである」と如何に注意したとしても、就職試験などで調査を行えば、被調査者に何らかの構えを作らせてしまうことはほぼ確実であり、このために記名と無記名とが必ずしも調査者の意図した条件統整法にはならないことになる。

(3) 次に被調査者の精神的発達段階が重要な条件となる。同じような調査を異なる精神発達段階にある集団に実施した場合には、記名要因は必ずしも同じ作用をするとは限らない。

(4) また、被調査者が如何なる社会的・文化的環境の中で生活して来ているかということが、重要な問題である。今後の実証的研究に俟たなければ確言はできないが、例えば、鎖ざされた社会に生活する者と開かれた社会に生活する者とは、記名要因の作用の仕方に差異があるものと考えられる。

II 研究の目的

ここに報告するわれわれの研究は、質問紙調査法における記名要因の作用に関して組織的包括的な検討を行ったものではない。われわれの作製した質問紙が、記名式と無記名式のどちらを採用することによって、より良くしつけの現実を把握できるかを検討するために、まずこの両方式の間に有意な差異が生ずるか否かを明らかにする必要にせまられた。もしこの両方式の間に有意な差異が生じたならば、次にいずれがよい方法であるかの研究を進める必要があり、また両方式の間に有意な差異がないならば、個々の調査結果を利用する上に便利な記名式を採用することが可能となる。

われわれは、質問紙によって親の子どもに対するしつけ態度を調査する場合に、記名要因の働く方向として次の三つを予想している。

(1) 親は担任教師に対して自分の子どもおよび自己をよりよく評価してもらいたいと考え、日常自分が実際に行っているしつけ態度よりも、親自身が望ましいと考えているしつけ態度を報告するかも知れない。

(2) 担任の教師に対して、親が意識的無意識的に劣等感ないしは無力感を抱いているときには、親は過度にきびしい自己反省を行って、家庭の実際場面でも多くとっているしつけ態度をあからさまに表現することをためらい、むしろ極くまれにしか起らないような、しかもあまり望ましくないと思われるしつけ態度を報告するかも知れない。

(3) 被調査者に記名の責任を執らせることは、ある

場合にはでたため応答を減じさせるかも知れない。ただし調査結果が親にとって望ましいと思われる方向に変化するか、あるいはその逆の方向に変化するかは、一概に決定することができない。

以上の予想のもとにわれわれは、地方小都市およびその近隣農村地域の小中学校児童の親たちに、教師が生徒指導のために行う教育調査という条件を定めて、記名要因が如何なる作用を及ぼすかを調査した。

III 調査問題(6)

われわれのしつけ調査においては、親の態度の示される主要な領域を次の八つとした。

(1) 子供の将来	(2) 学 習
(3) 友 人	(4) 趣 味
(5) 遊 び	(6) 手伝い
(7) 衛生習慣	(8) 礼 儀

これらの諸領域のそれぞれにおいて、次の四つのしつけの型があげられる。

イ 放任型	ロ 溺愛型
ハ 専制型	ニ 民主型

被調査者は八領域のそれぞれにおいて、子どもに対して日常如何なるしつけ態度を執っているかを考え、上述の四つの型のうちで最もよく該当するものに○印をつける。

記名の場合の調査問題は次の通りである。なお、無記名式の調査用紙では、学年・学級・氏名の記入項目が除かれており、また、「1. 気をつけていただくこと」のところに、

「ハ、これは学級全体を調べるものでして、一人一人を調べるものではありません」

という注意書きが附加されている。

印刷上の手違いから、調査に用いた用紙は記名式・無記名式とも、遊びの領域の

「ニ、毎日適当な時間だけは危いことをしないかぎり、存分遊ばせるようにする。そして遊んできたことについて子どもがいろいろ話してくれるように気をくばる。」

の項目が脱落していた。

調 査 用 紙 (記名式)

____年____組 氏名_____

3 2 1 高中低 男女 一人つ子 長子 末つ子 中間子

これは家庭で、お父さんお母さんが、お子さんに対して、今迄どんな風にあつたつていらつしやつたかを調べものです。お子さんの指導上の参考にしたいと思いま

すから、ありのままお書き下さい。くれぐれもありのままのことをお示し下さい。

1 気をつけていただくこと

イ いつも家でじつさいに、子供さんに対して、とつて来た態度を書いて下さい。実はこうしたいのだという意見は書かないように。

ロ この紙を持って来た子供に対しての態度を書いて下さい。他の兄弟姉妹のことではありません。

2 書き方について

イ 書いていただくのは **生活** および **問題** 1—8 についてです。その一つについて四つづつの項目（イロハニ）があります。その中で一番よくあてはまると思われるものに○をつけて下さい。

ロ もし四つの項目のうち、唯一つだけでなく、二つ以上にあてはまる時は、その数だけ○をつけて下さい。

ハ もしあてはまるものがなければ、その他（ ）のところに書いて下さい。

生活 つぎの四つの中のどれにあてはまるか見つけてイロハニの字の上に○をつけて下さい。

イ 必要な学用品は、らくに買えます。

ロ 必要な学用品は、どうにか買えます。

ハ 必要な学用品は、非常に無理をして買つてやりま

す。

ニ 必要な学用品でさえ、買つてやれませんか。

問題 イロハニの字の上に○をうつして下さい。

1 子供の将来については

イ 子供が思うように進むがよいと考えてあまりこのことにかまつてやらなかつた。

ロ 親の近くにいるような仕事で、あまり危くない職につくように話しあつて来た。

ハ 親の職をつがせるか、又は親の望んでいる仕事につくように言いきかせて来た。

ニ 子供の能力に合い、子供の好きな仕事によく考えさせて進ませるように、つとめて来た。

その他（

2 学習については

イ 子供が宿題について、いろいろきいても、あまり面倒を見なかつた。

ロ 宿題は一しよによく見て教えてやり、子供の出来ないときは、手伝つてやつた。

ハ 子供は宿題をあまり気にせず、遊びまわっている

ので、毎日きびしく言つて必ずやらせるようにして

きた。

ニ 宿題はできるだけ自分でやるようにしむけてき

た。いつも子供の勉強に心をくばつて、ほめたり、はげましたりしてきた。

その他（

3 遊び友だちについては

イ 子供の遊び友だちについては、何も考えていない。子供のすきなようにさせてきた。

ロ 親の方でよい友だちを、あれこれ考えて、遊びに来てくれるように、気をくばつてその友だちと遊ばせるようにしてきた。

ハ わるい家庭の子供とは遊ばせない。家とつり合つた家庭の子と、遊ばせるようにしてきた。

ニ 子供が仲よく、おもしろく遊べると、言っている友だちは、どんな性質の子供かそれとなく調べるように、気をくばつてきた。

その他（

4 子供の趣味については

イ 子供が自分のすきなことをやり出したら、すきなようにさせてきた。

ロ 子供がやりたい趣味については、何でも気をきかせてやれるように、ととのえてやつてきた。

ハ 子供が趣味はともかく、親の大切だと思う趣味を、どこまでもやらせるようにしてきた。

ニ 子供が趣味をうつたえたら、よく相談して考えてやり、その上でほしい物はととのえてやつた。

その他（

5 遊びについて

イ 何をして遊んできても、何も言わないようにしてきた。

ロ なるべく危くない所で遊ばせ、又子供がほしが

る遊び道具は、たいてい買つてやるようにしてきた。

ハ 遊びはきりがないので少し遊ばせたら後は家で遊ばせるようにしてきた。そして遊んできたことにつ

いて、子供がいろいろ話してくれるように、気をくばつてきた。

ニ 毎日適当な時間だけは危いことをしないかぎり、

存分遊ばせるようにする。そして遊んできたことにつ

いて子供がいろいろ話してくれるように気をくば

る。

その他（

6 手伝については

イ 子供が手伝をしたがつても、いやがつても、何も云わずにそのままに

してきた。

ロ 子供が手伝をするのはかわいそうだから、余り家の

仕事はさせない。手伝をするより好きな事をさせて

ハ 子供が少しくらいお手伝いをやがつても、必ずやらせるようにしてきた。

ニ 家の仕事は家中みんなが話し合つて、うけもちをわけてやることにしてきた。

その他（

7 衛生の習慣については

イ 食事の時子供が手を洗わなくても、何も言つたことはなかつた。

ロ 食事の時子供が手を洗うことをいやがれば、手伝つてやつてでも、せいけつをたもつようにしてきた。

ハ 子供が手を洗わずに食事をしようとする時は、叱つてでも毎日きれいに洗わせてきた。

ニ 子供が手を洗わずに食事をしようとする時は、衛生のことを子供になつとく出来るように話してやり、家の者も子供と同じように実行するようにして来た。

その他（

8 お客さんへの礼儀については

イ お客さんへのあいさつについては、あまり教えなかつた。

ロ お客さんへのあいさつは、そんなにやかましく言わずに、いつも親がいつしよになつてするようにしてきた。

ハ お客さんへはきちんとあいさつするように、きびしく言つて実行させてきた。

ニ お客さんへのあいさつは、子供とよく話し合つて、子供が自分になつとくしてするようにしむけてきた。

その他（

まとめ

1 あなたの家庭で、子供のしつけに一番心をくだしているのはつぎの中のどなたですか、○でかこんで下さい。いくつつけてもよろしい。

祖父 祖母 父 母 兄 姉 その他

2 この調査の答を書いた人、及び意見を出した方はつぎの中のどなたですか、○でかこんで下さい。

父 母 その他（ ）

Ⅳ 研究方法

(1) 調査の方法

調査用紙は記名式および無記名式の二種類を用いる。調査はいずれのばあいも、教師が実際教育の必要から行なうものとして、児童・生徒の親たちに記入してもらう。調査は一カ月の期間を隔てて、第1回目調査と第2回目調査と合計2回行なう。調査計画は第1表のとおり

である。

Table 1 調査実施計画

調査順序	学 校			
	小 校	学 校		
第 1 回	記名	記名	欠 (無記名)	無記名
第 2 回	無記名	記名	欠 (記名)	無記名

調査順序	中 学 校			
	a 校	b 校	c 校	d 校
第 1 回	記名	欠 (記名)	無記名	無記名
第 2 回	無記名	欠 (記名)	記名	無記名

(2) 被調査者

つぎの学校の児童・生徒の両親その他。

A校 群馬県山田郡福田村小学校

B校 群馬県山田郡相生村小学校

C校 郵送事故のため、資料が得られなかつた。

D校 群馬県山田郡毛里田小学校

a校 群馬県宝泉村宝泉中学校

b校 郵送事故のため、資料が得られなかつた。

c校 群馬県佐賀群赤堀中学校

d校 群馬県佐波郡境町境中学校

計6校 被調査人員 273人

この被調査校および被調査クラスは、地方小都市および農村という観点から便宜的に選択したのであるから、厳密な意味における無作為標本選択の理論に基づいたものではない。したがつて、推計学的検定をこの調査結果に適用することは理論的に不可能であるが、この研究においてはもしもこれが無作為標本抽出とみなすことができるとすればという仮定のもとに、検定を施してある。

(3) 調査の時期

1953年2月から3月までの間に調査を行なつた。

Ⅴ 調査結果およびその考察

(1) 調査用紙記入者の分析

2回の調査用紙を同一人が記入したばあいが大部分であるけれども、なお二割程度は第1回目調査の記入と第2回目調査の記入とは異なる人が記入していることが判明した。(第2表参照)

(2) 第1回目調査における記名群と無記名群との 応答分布の比較

第2表から分るように、第1回目調査における記名群の人数は(91+54)名 すなわち 145名であり、無記名群

Table 2 記入者の分析

調査の 順	記 → 無記			記→記	無記→記	無記 → 無記			計
	A	a	計	B	C	D	d	計	
記入者									
同一人	37	27	64	39	43	34	34	68	214
異なる人	13	14	27	15	0	7	10	17	59
計	50	41	91	54	43	41	44	85	273

Table 3 第1回目調査における記名群と無記名群との
応答分布の比較

領域	型	記名群 145人	無記名群 128人	分布の検定	有意性
生活	イロハニ 学用品はらくにかう どうか 非常に無理する 買えない	17.9% 69.7 11.7 0.7	18.9% 57.6 18.2 5.3	$\chi^2=6.3727$ df=2 .02<P<.05	*
1 将来	イロハニ 放溺専民 任愛制主	23.6 14.2 11.0 51.2	23.8 5.6 22.2 48.4	$\chi^2=7.087$ df=3 .05<P<.10	
2 学習	イロハニ 〃	19.6 21.6 8.5 50.3	22.3 22.3 6.5 48.9	$\chi^2=.6414$ df=3 .80<P<.90	
3 友人	イロハニ 〃	41.8 12.4 13.0 32.7	44.4 10.6 14.8 30.3	$\chi^2=.5607$ df=3 .90<P<.95	
4 趣味	イロハニ 〃	41.0 12.2 7.1 39.7	45.3 7.4 5.4 41.8	$\chi^2=2.4012$ df=3 .30<P<.50	
5 遊び	イロハニ 〃	20.2 38.4 41.3 —	26.2 32.5 41.3 —	$\chi^2=1.6032$ df=2 .30<P<.50	
6 手伝	イロハニ 〃	8.7 6.7 46.3 40.3	1.4 5.0 40.3 53.2	$\chi^2=8.0480$ df=3 .02<P<.05	*
7 衛生習慣	イロハニ 〃	20.9 23.0 29.7 26.4	20.8 10.4 33.6 35.2	$\chi^2=8.2181$ df=3 .02<P<.05	*
8 礼儀	イロハニ 〃	31.4 35.0 9.3 24.3	28.8 21.6 16.8 32.8	$\chi^2=8.8682$ df=3 .02<P<.05	*
1~8 合計	イロハニ 〃	26.1 20.2 20.4 33.2	26.7 14.1 22.0 37.1	$\chi^2=14.1211$ df=3 P<.01	**
1.2.3 4.6.7 8 合計	イロハニ 〃	26.9 17.7 17.7 37.7	26.8 11.7 19.5 42.1	$\chi^2=15.419$ df=3 P<.01	**

の人数は(43+85)名 すなわち 128 名である。これらの被調査者について、記名のばあいの応答と無記名のばあいの応答との間にいかなる差異があるかを検討すると、第3表のとおり結果が得られた。

これによると、記名群と無記名群との間には、将来・学習・友人・趣味・遊びの5領域に関して応答分布に有意な差異が見られない。しかしながら、手伝い・衛生習慣・礼儀の3領域に関しては、両群の応答分布に5パーセントの危険率で有意な差異が見られた。8領域中3領域だけが5パーセントの危険率で有意な差異があり、他の5領域に関しては有意差がないということは、Wilkinsonの表(7)に従えば、全体として両群には有意な差異がないことになる。したがって、このような観点からこの調査問題におよぼす記名・無記名の要因を検討するならば、この要因は調査結果にほとんど影響を及ぼさないとはいえる。

しかしながら、8領域の分布の合計および遊びの領域を除いた7領域の分布の合計について、記名群と無記名群とを比較すると、いずれも有意な差異が見られること、および手伝・衛生習慣・礼儀の3領域はそれぞれ両群に有意な差異があることが問題となる。

この二つの問題に関して共通な傾向は、無記名調査のばあいには、記名調査のばあいよりも民主型が増加していることである。このことに関しては、つぎに評価値の観点から検討する。

(3) 第1回目調査における記名群と無記名群との応答の評価値による比較

われわれはこの研究とは別につきのような研究(8)を行なった。すなわち、8領域のそれぞれのしつけの型に対して、群馬県太田市近隣の児

童の親たちに、教育的に考えてどの程度望ましいかを5段階尺度法によって評価させた。その結果、第4表のような評価値が得られた。

Table 4 しつけの型に対する親の平均評価値

領域	型	評価値	領域	型	評価値
1. 将来	イ. 放任	-.49	5. 遊び	イ. 放任	-1.07
	ロ. 溺愛	.60		ロ. 溺愛	.36
	ハ. 専制	.07		ハ. 専制	1.01
	ニ. 民主	1.66		ニ. 民主	1.29
2. 学習	イ. 放任	-.90	6. 手伝	イ. 放任	-1.09
	ロ. 溺愛	.75		ロ. 溺愛	-1.03
	ハ. 専制	-.85		ハ. 専制	.86
	ニ. 民主	1.62		ニ. 民主	1.61
3. 友人	イ. 放任	-.64	7. 衛生習慣	イ. 放任	-1.33
	ロ. 溺愛	.36		ロ. 溺愛	1.05
	ハ. 専制	.08		ハ. 専制	1.11
	ニ. 民主	1.22		ニ. 民主	1.67
4. 趣味	イ. 放任	.61	8. 礼儀	イ. 放任	-.90
	ロ. 溺愛	.42		ロ. 溺愛	.50
	ハ. 専制	-.22		ハ. 専制	.38
	ニ. 民主	1.47		ニ. 民主	1.43

N=193

この評価値を用いて、第1回目調査における記名群の応答と無記名群の応答との平均評価値を算出すると、第5表のとおりとなる。第5表によると、将来・学習・友人・遊びの4領域は記名群の方が無記名群よりも高い平均評価値を示しているが、これは統計的に有意なものではない。ところが、手伝、衛生習慣、礼儀、および全領域の平均、遊びを除く七領域の平均に関しては、平均評価値は無記名群の方が記名群よりも有意的に高い。けれども、これらの有意な差異も、その値は0.3以下で心理学的には大きな意味を持たないから、記名—無記名要因は調査結果にほとんど差異をもたらさないと結論できる。

(4) 第1回目調査と第2回目調査との間に生ずる変動についての考察

1カ月の期間において、調査を2回実施したが、2回とも同じ人が記入した資料についてのみ、その間に生じた変動を検討した。(第2表参照) 第1回目の記入結果

Table 5 第1回目調査における記名群の平均評価値と無記名群の平均評価値

領域	記名群	無記名群	有意性
1. 将来	.826	> .736	
2. 学習	.873	> .814	
3. 友人	.186	> .135	
4. 趣味	.870	< .910	
5. 遊び	.555	> .254	
6. 手伝	.865	< 1.136	*
7. 衛生習慣	.733	< .793	*
8. 礼儀	.275	< .382	*
1~8 平均	.661	< .704	**
1. 2. 3. 4. 6. 7. 8. 平均	.649	< .651	**

有意性の検定は、第3表の χ^2 検定による。

と第2回目の記入結果とを、各領域ごとに第4表の平均評価値に照して検討し、第1回目より第2回目の方がより高い評定値を持つ項目に記入されているときには「良」として、2回とも同じ項目に○印がつけられているときには「同一」とし、項目が異なつていてもその間に評定値の差が0.5より小さいときには「ほぼ同」とし、2回目に記入されている項目が1回目に記入されている項目よりも低い評定値を持つ項目に○印がつけられているときには「悪」として整理した。この四つの態勢に関する応答分布について統計的に検討したのが第6表である。

第6表を見ると(記名→無記名)群と(無記名→無記名)群との間には、2回の調査の変動に関してはほとんど差異がないことが分る。また、(記名→無記名)群、(記名→記名)群、(無記名→記名)群、(無記名→無記名)群の4群の間に、変動の差異が見られるのは8領域中将来の1領域だけで、Wilkinsonの表を適用すれば明らかに8領域に関して4群の間に差異がないことになる。ただ注意しなければならないことは、8領域を合計すると4群の間に有意な差異があることである。この点に関しては今後なお検討しなければならない。

以上の検討から、記名—無記名要因は、2回の調査間において生ずる変動にほとんど影響を及ぼさないと結論できる。

VI 要約および結論

しつけ調査において、記名式と無記名式といずれがよいかを決定するために、まず被調査者の署名が調査結果

Table 6 第1回目調査と第2回目調査の間におこる変動の比較

						分布の検定	
		記→無記	記→記	無記→記	無記→無記	記→無記と 無記→無記	記→無記 記→記 無記→記 無記→無記
生活	異 同	(10) 15.2% (56) 84.8	(5) 12.2% (36) 88	(14) 32.4% (29) 67.6	(11) 17.2% (53) 82.8	$\chi^2=.9944$ df = 1 .30 < P < .50	$\chi^2=7.1510$ df = 3 .05 < P < .10
1 将来	良 同 一 同 ほぼ同 悪 悪	(10) 16.7 (34) 56.7 (0) 0 (16) 26.7	(6) 15 (29) 72.5 (5) 12.5 (0) 0	(13) 34.2 (22) 57.9 (0) 0 (3) 7.9	(9) 14.2 (45) 71.4 (0) 0 (9) 14.2	$\chi^2=.3469$ df = 2 .80 < P < .90	$\chi^2=21.4366$ df = 6 P < .01
2 学習	良 同 一 同 ほぼ同 悪 悪	(13) 19.4 (42) 62.7 (2) 2.9 (10) 14.9	(5) 10 (37) 74 (2) 4 (6) 12	(7) 16.7 (24) 57.2 (0) 0 (11) 26.2	(11) 16.1 (44) 64.8 (2) 2.9 (11) 16.1	$\chi^2=.3003$ df = 2 .80 < P < .90	$\chi^2=6.19256$ df = 6 .30 < P < .50
3 遊友 び達	良 同 一 同 ほぼ同 悪 悪	(9) 13.2 (33) 48.5 (5) 1.7 (16) 23.2	(6) 13.0 (34) 74 (1) 2.2 (5) 18.9	(8) 17.1 (28) 59.6 (1) 2.1 (10) 21.2	(14) 21.2 (44) 66.7 (1) 1.5 (7) 10.6	$\chi^2=5.1412$ df = 2 .05 < P < .10	$\chi^2=8.270166$ df = 6 .20 < P < .30
4 趣味	良 同 一 同 ほぼ同 悪 悪	(14) 22.2 (39) 61.9 (1) 1.5 (9) 14.2	(5) 13 (36) 73.5 (1) 2.2 (7) 14.3	(5) 11.9 (31) 73.9 (1) 2.4 (5) 11.9	(7) 9.8 (48) 67.7 (3) 4.2 (13) 18.3	$\chi^2=4.5224$ df = 2 .10 < P < .20	$\chi^2=11.85705$ df = 6 .05 < P < .10
5 遊び	良 同 一 同 ほぼ同 悪 悪	(8) 13.3 (36) 60 (0) 0 (16) 2.7	(3) 7.7 (29) 74.4 (0) 0 (7) 17.9	(7) 18.4 (23) 60.5 (0) 0 (8) 21.2	(11) 19.3 (36) 63.2 (0) 0 (10) 17.5	$\chi^2=1.7828$ df = 2 .30 < P < .50	$\chi^2=8.841356$ df = 6 .10 < P < .20
6 手伝	良 同 一 同 ほぼ同 悪 悪	(9) 14.5 (39) 60.9 (0) 0 (16) 25.0	(3) 8.1 (28) 75.6 (1) 2.7 (5) 13.5	(4) 9.1 (34) 77.2 (0) 0 (6) 13.6	(8) 11.9 (49) 73.1 (1) 1.5 (9) 13.4	$\chi^2=3.3069$ df = 2 .10 < P < .20	$\chi^2=6.09394$ df = 6 .30 < P < .50
7 衛生	良 同 一 同 ほぼ同 悪 悪	(9) 16.0 (34) 60.7 (5) 8.9 (8) 14.2	(4) 9.5 (26) 61.9 (6) 14.3 (6) 14.3	(6) 17.6 (21) 61.8 (2) 5.8 (5) 14.7	(10) 16.7 (37) 61.7 (6) 10.0 (7) 11.2	$\chi^2=0.1770$ df = 2 .98 < P < .99	$\chi^2=1.519488$ df = 6 .95 < P < .98
8 礼儀	良 同 一 同 ほぼ同 悪 悪	(11) 19.3 (33) 57.8 (0) 0 (13) 22.8	(7) 17.3 (25) 62.3 (3) 7.5 (5) 12.5	(7) 17.5 (25) 62.5 (1) 2.5 (7) 17.5	(13) 19.7 (35) 53.1 (3) 4.5 (15) 22.6	$\chi^2=0.0032172$ df = 2 .98 < P < .99	$\chi^2=2.8014$ df = 6 .80 < P < .90
1~8 合計	良 同 一 同 ほぼ同 悪 悪	(83) 16.9 (290) 59.2 (13) 2.7 (104) 21.2	(39) 11.4 (244) 71.1 (19) 5.5 (41) 12.0	(57) 17.5 (208) 64.0 (5) 1.5 (55) 17.0	(83) 16.0 (338) 65.3 (16) 3.1 (81) 15.6	$\chi^2=6.0647$ df = 3 .10 < P < .20	$\chi^2=30.160736$ df = 9 P < .01

括弧内は実数。

にいかなる差異をもたらすかを検討した。調査は、教師が行なう教育調査という実践的な条件下において、群馬県の一小都市およびその周辺の農村地帯の小中学校児童の親たちについて行なった。その結果、第1回目調査においても、また第1回目調査と第2回目調査（間隔は1カ月）との間に起る変動においても、記名要因はほとんど有意な作用をしていないことが明らかになった。したがって、われわれが今後しつけの文化型を研究してい

く際には、実際の便利から記名調査用紙を用いることに決定した。（いうまでもなくこの結論は、限られた調査対象についてのみ適用されるべきものである）

附記

この調査研究の実施にあたって多大の御協力を与えてくださった、福田村小学校教官松島昭吉氏、相生小学校教官飯塚誠一氏、毛里田小学校教官青木嗣夫氏、宝泉中学校教官境茂氏、赤堀中学校教官小林登志子氏、境中学

校教官手島敬吉氏に深い謝意を表します。

文 献

- (1) Koos, Leonard V. ; The Questionnaire in Education. New York : MacMillan Co. 1928. p.106-109.
(in "The Waiver of Signature in Personal Reports by Olson, Willard C. ; J of appl. Psychol., 1936 20. p.442-450)
- (2) Maller, Julius B. ; The Effect of Signing Ones' name, School and Society, 1930. 31. p.882-884.
(in Olson's Monograph, op. cit)
- (3) Olson, Willard C. ; Tha Waiver of Signature in Personal Reports J. of. appl. Psychol., 1936, 20, p.442-450.
- (4) Fischer, R.P. ; Signed versus Unsigned Personal Questionnaires. J. of appl. Psychol., 1946. 30, p.220-225 (Abstract)
- (5) 松井資夫・羽場究; 採用試験時における自己評定 応用心理学会第15回大会発表
- (6) 石黒大義; 溺愛・放任・専制 児童心理第8巻9号 金子書房
- (7) Wilkinson, Bryan; A Statistical Consideration in Psychological Research., Psychol. Bull., 1951, 48, p.156-168.
- (8) 石黒大義・藤原喜悦; しつけ態度の型に対する親の評価 教育心理第1巻第9号 日本文化科学社

general, they were not inferior, but quite normal.

They say that prematurely born children are inferior, when they are very young. But we do not necessary hear this, when they enter into teenages. It seems to us they are evaluated by undue C.A. when young, but their true developmental ratio appear soon or later.

(5) This formula, too, has a disadvantage, because two different developmental phases of prenatal and postnatal periods are treated as the same. (This is apparent in the sign of plus.) While the development of prenatal period is chiefly physiological, and potential, we should say, in a psychological aspect, the postnatal one is convergent of physiological growth and environ-

mental stimuli. A child whose developmental ratio is higher than 1.25, and who is born at 8th month, may be unduly advantageous, because he has greater percentage of periods when he is stimulated by outside experiences, being acceptable of them even at the time of premature birth. Here is a possibility of re-correction.

Though we can say, at any rate, that $\frac{t}{t+a}$ ($a > 0$) instead of $\frac{t}{t}$ in the denominator may be better, that this a might be expressed

$$a = (10 - t) \times c \quad (1 > c > 0)$$

and that c should be determined experimentally, it is very difficult for us, because our present scales of physiological and psychological measurements are too rough and poor for these purposes.

SIGNED VERSUS UNSIGNED QUESTIONNAIRES OF THE PATTERN OF PARENTAL ATTITUDE TOWARD CHILDREN

—A study of Questionnaire Method—

Nagoya University

Ishiguro, Taigi

Noma Institute of Educational Research Fujiwara, Kietsu

Purpose :

In our study upon the pattern of parental attitude toward children, we made the questionnaire in which parents were asked of their daily attitude. But in the administration of this questionnaire, the effect of signing one's name upon the result of it should be taken into consideration. If any significant difference between the results of the signed and the unsigned questionnaires could not be noticed, we should be allowed to employ the signed questionnaire in our future study. If not, we should investigate the causes of it and determine which of the two, the signed and the unsigned questionnaires, was more suitable to our study.

This paper mainly dealt with the effect of signature upon the parental reports of their atti-

tude toward children.

Method :

In our questionnaire, parents were asked which one of the four patterns (non-interferent, over-protected, authoritarian and democratic) agreed with that which were really adopted by them in their attitude toward their children. All the subjects were divided into four groups (signed-unsigned, signed-signed, unsigned-signed and unsigned-unsigned) and they were tested twice by the interim of one month. The research plan can be seen in Table 1.

The number of subjects was 273 and they were selected at our convenience from those who lived near Ota City in Gumma Prefecture. Our research was conducted during February and March of 1953.

Results :

Between the results of the unsigned and the signed group concerning the initial test, we could find significant difference in only three areas out of eight so that we could not recognize any significant effect of signature upon the result of our questionnaire. In addition to this, we could not also find any significant difference between the variations during the interim of one month among the four groups.

Conclusion :

In our study, we could not find any significant effect of signature upon the result of parental reports of their daily attitude toward children. Therefore, we should be allowed to employ the signed questionnaire in our future research. (Put we should be careful of the limitation of this conclusion that our results were not based upon the random sample procedure.)

A STUDY OF THE CORRELATION BETWEEN PERSONAL CHARACTER AND THE DEGREE OF PHYSICAL MATURATION

By Ohira, Katsuma

Kanazawa University.

The present paper is a report on the study of the correlation between the degree of physical maturation, determined by the planimetric method of carpal bones, and personal character which is appraised by using Kraepelin numeral addition test, adjustment test and moral judgment test. The research and experiment were made during the period from May, 1952 to October, 1952. The number of subjects is 102-- from 4th grade to 6th grade of elementary school children.

The abstract of the result is as follows :

- 1) the author found that there is correlation coefficient .311 between the degree of physical maturation (indicated by growth quotient=G.Q) and the result of Kraepelin numeral addition test (indicated by Standard Score) and the r is significant at 1 percent level.
- 2) The r between physical maturation degree and the result of adjustment test is .195 and the r is insignificant at the 5 percent level. But there is correlation ratio .423 and the difference between r and η is significant at the 5 percent level.

- 3) The result of moral judgment test indicates r . 228 or η . 505 between the result and the physical maturation degree; then the r and the difference between r and η are respectively significant at the 5 percent level.
- 4) There are deeper correlations between the result of three tests of personal character which were used in this study and the intelligence than the correlation between the test results and bodily maturation degree. Furthermore, the author studied last year that there is the low correlation between the physical maturation degree and intelligence. So if we recognize the common factor of intelligence between personal character and physical maturation degree, and remove the common intelligence factor, there is no correlation between personal character and bodily maturation degree. However if we do not consider about the intelligence factor, the author may conclude that there is actually a low but considerable correlation between personal character and physical maturation degree.